

### 「青い目の人形」と「答礼人形」の今日的な意味

——なぜ人形は90年の時を経て私たちを動かすのか——

近藤 暁夫

#### あいさつ

最初に、私（近藤）から今回のシンポジウムの趣旨を簡単に説明させていただきます。もともと、本日の趣旨等は皆さまお手元のプログラムや案内ポスターの方に既に書かせていただいておりますし、私が話すよりも、本日の講師の皆さまが、私よりもより詳しいのが本当のところです。青い目の人形や日米交流と申しましても、私が大学で教えている専門分野は地理学で、しかも大して英語も喋れないのですが、人文社会学研究所の代表ならびに答礼人形を里帰りさせる会の副会長として、僭越ながら私が最初の話させていただきます。

#### 「青い目の人形」と「答礼人形」とは何か

ここ（舞台上）に置いてあるのが、答礼人形の「ミス愛知」です。ただし、これは実物ではなくパネルですが、大きさは実物大になります。その隣（舞台上）にある人形は、「青い目の人形」を日本に贈って来られた立役者のギュリック1世のお孫さんであるギュリック3世さんが、この方はアメリカでご健在ですが、お爺さまの意志を継いで日本に贈られた「新青い目の人形」のうちの一体です。本日のシンポジウムに合わせて特別に拝借してきました。

ギュリック1世は同志社大学と京都大学で教鞭をとられた経験があり、大変日本に造詣が深い方でした。アメリカで日本移民への排斥の機運が高まっていた1927年、その方が中心となりましてアメリカの子どもと親たちに呼び掛けて、約13,000体の青い目の人形が日本に贈られたことにより、今回の物語ははじまりました。先ほどご紹介したこの新青い目の人形は、ギュリック3世の奥さまが、服などもご自身で手作りされたものだということです。90年前の青い目の人形も、アメリカの子どもたちやお母さんたちが、募金を集めて、さらに自分たちで服を手作りして着せて贈ってくれたと聞いています。

ギュリック1世は「返礼不要」と仰っていましたが、日本でも青い目の人形が送られてきたことを受けまして、澁澤榮一さん——この方はこの間のNHKの朝の連続ドラマ『あさが来た』に「銀行の神様」として出てきた人です。この澁澤が中心となりまして、小学生など民間から寄付を集めて、日本人形58体を送りました。アメリカから贈られて来たのが青い目の人形で、それに対して答礼として送った人形ということで、この58体は「答礼人形」と呼ばれています。この58体は、当時の道府県や6大都市、当時の植民地の台湾など、それぞれの地域の代表として贈られました。もっとも、「ミス愛知」や「ミス名古屋」といっても、特に愛知県でつくられた人形と言うわけではありません。ただ、いずれも当時の最高の技術を尽くして送った人形になります。愛知県からの代表として「ミス愛知」が、そして名古屋市からは「ミス名古屋」が太平洋を渡りました。現地では大変に歓迎されたという記録が残っています。

これが1927年のことで、その後の1945年に至る日米の歴史はご存知だと思いますので省略致しますが、多くの青い目の人形が、ギュリック1世や澁澤榮一の願いもむなしく、日本人

による自主的な破棄や空襲によって失われました。しかしながら、これが歴史の悲劇の1ページで終わるのではなくて、戦後、ある程度の年数が経ってから、再び青い目の人形と答礼人形をもう一度探す運動が起こり、そして二度と歴史の悲劇を繰り返さないようにと、再び日米で人形を通した民間での交流が続いて、現在に至っています。

### シンポジウムを企画したわけ

今回は学術シンポジウムですので、この100年近い「人形交流」の歴史を、学術的な立場で言いますと、戦争を乗り越えて、今年(2016年)で89年、来年90年になりますが、今も太平洋を挟んだ民間交流が続いていることは、世界的に見ても非常に貴重なことであります。1927年に大規模な人形の交換、人形交流があったということを、単に歴史の1ページで終わらせるのではなくて、常にその理想と成果・課題を捉えなおし、そしていかに引き継いでいくかということが、今を生きている我々の、今日そして未来に関する課題でありましょう。

この運動自身は、もちろんそれ自体社会運動平和運動として社会的価値があることは勿論なのですが、この活動、この運動がたどってきた歴史自体が、あとで述べるように世界的に見ても十分記録していく価値、学術的な価値を持っていると考えています。そういう思いで、本日のシンポジウムを企画しました。

この舞台上にあります答礼人形「ミス愛知」は、長らく所在が不明になっていたのですが、最近、アメリカで所在が確認されまして、それでこの度、人形交流90周年に合わせて里帰りを実現させようと結成されたのが「答礼人形を里帰りさせる会」です。本シンポジウムに先立って総会を行いまして、これで正式に発足した形になります。その会が正式発足して活動の最初に、本学でこのような企画をさせて頂くことができる運びになったことは、大変光栄なことだと考えています。それと申しますのも、私立大学というものは、どこも建学の精神というものがあまして、これが大学にとって一番大事な行動指針になっています。愛知大学の場合、建学の精神は3本柱になっています。1つ目に「世界文化と平和への貢献」、2つ目が「国際的教養と視野をもった人材の育成」、3つ目に「地域社会への貢献」です。この3本の柱を大学の根本的な目標として掲げて、これに沿って教育・研究活動を行うのが本学の役割であり方針だと社会に約束しているわけです。今回のシンポジウムというか答礼人形を里帰りさせる会の活動は、人形の名が「ミス愛知」ですので、当然愛知大学のある愛知県の皆さま方と関わりがあり、これを本学としても主体的に応援すること自体が地域貢献できることになります。また、青い目の人形と答礼人形を通した活動が本来的に平和運動という性質を持っていることから考えれば、本シンポジウムの開催は建学の精神のひとつ世界文化と平和への貢献が期待できます。さらにこの人形交流運動というものは、90年間にわたる太平洋をまたいだ国際的な交流の歴史でありますから、これを学び考えることは国際的な教養と視野の涵養という点においても本学の建学の精神に合致します。ですから、このような企画を本学で開催させて頂くことは、大変名誉な事だと考えています。

### 「人形交流」の今日的な3つの意義

さて、話を趣旨説明に戻すとして、本シンポジウムの目的は人形交流の歴史とアクチュアリティを考えるということで、そのアクチュアルな意義について私なりに思う点を最初に提示させて頂きます。3点あります。

1つ目は、いつの時代においても歴史に学ぶことは、私たちの現在と未来のために大切であり、その材料として人形交流は好適な事例であるということです。この人形交流のような民間

交流の記録やその実態は、実際のところ歴史の教科書にはほとんど載っていません。歴史の表舞台においては、どうしても政治家や偉い人の話が目立つこととなります。しかし、こういう、民間から立ち上げて引き継いでいく地道な活動の意義は、何度でも何度でも、民衆自身が、あらゆる機会に見直していくことが必要だと思います。私たちは偉い人ではないので、個人で教科書に載るような偉業はなかなかできませんが、このような運動に参加することは十分にできます。私たち偉くもない市井の人間たちにとって歴史を学ぶ意義とは、むしろこのような私たちでもきっかけがあればすぐにできそうな活動について学ぶことに対してあるのではないでしょうか。

もちろん、人形交流については、草の根の運動の意義と共に、それが戦争を究極的には回避させる力を持たず、戦火の中で儂く壊れてしまったという事も含めて、その限界も歴史の教訓として学ぶことが大事でしょう。日本に來た青い目の人形は、残念なことに戦争中ほとんどが燃やされたり壊されたりしました。実に不幸なことです。そのような現在の私たちの感覚では暴挙とみなされることをされた方々も、実際には彼らが悪党だったからそんなことをしたわけではない。実際には、彼らはどこにでもいる普通の方だったと思います。普通のお父さん、お母さん、そしてお子さん。おそらく、多くは家庭ではよき父・母であり、よいお子さんだったでしょう。そのような、善人も悪人も、戦争という時代の中では、容易く、おそらく普段は人形を燃やすようなことはしない人たちが、そのようなことをするようになってしまったということを歴史の教訓として直視しなければなりません。善人だから人形を歓迎し、悪党だから人形を壊すわけではないのです。そのことを無視して彼らの行為のみを断罪しても仕方ありません。もちろん反省は必要ですが。

この人形の歴史を通してみえてくるのが人間の持つ二面性です。一方では、どこにでもいる普通の人々が、広く善意で持って人形を贈りあうことができた。そして、その善意を持っていた人たちとおそらくそう変わらないだろう普通の人たちが、少し歯車が狂うと一方で容易く人形を壊してしまった。このようなことが、歴史の事実としてあるということです。これを、今を生きる私たちやっぱり「普通」の人間がどう捉えて考えるかが問われるのだと思います。人間が誰も共に可能性として持っている、狂気と破壊の部分をついに防ぎ、和解と交流の可能性の部分をついに活かしていくか、その意義と意味をどう受け継いでいくか、あるいはどのように教育に生かすか。そういう意味でも今日、歴史の証人として青い目の人形と答礼人形が私たちの手に残っているということは、大変に幸運な事であり、先人たちから託された人形、これらの役割と歴史を学び、よりよい形で引き継いでいくことが我々に課せられた課題であると考えています。

2つ目に、残念な事でもありますが、現代の世界も、1927年当時と同じように、人形が必要とされている社会状況であり続けていることです。例えば、先日(2016年6月)イギリスでEU離脱の選択が国民投票で議決されました。そのような選択がなされた大きな要因が移民に対する反感であったと指摘されています。もともと、ギューリック1世が、なぜ青い目の人形を日本に贈ろうと思いついたかという、当時のアメリカで日系移民に対する排斥運動が非常に大きく盛り上がったのを、何とかしようと考えたからでした。しかし、現在のアメリカにおいても、トランプ候補の言説でも指摘されていますが、ヒスパニック移民に対する差別的な感情があることは否定できません。残念なことに、今でも世界各地で移民や難民をめぐる深刻な不寛容と対立があります。その意味では、ギューリック1世は死んでも死にきれないところだと思います。

もちろん、移民や難民の問題は非常に複雑で、際限なく移民の受け入れをしよう、寛容の精

神で何でも乗り越えられると言い切れるかということ、それはそれで難しいのも現実です。しかし、青い目の人形と答礼人形という歴史を持ってしまった我々、すなわち交流の歴史と排斥と殺し合の歴史の両方を持ってしまった我々日本、そしてアメリカは、いかにして我々の辿った歴史から、悪しきものを繰り返さないためにはどうすべきか、そして良いものを受け継いで伸ばして行く事を常に考え続けなければならない使命を負わされているといわねばならないし、またそれを世界の人々に向けて発信していく責任があると思います。いつか、このような人形交流が歴史の彼方に去って、特別なことだと思われないこと、むしろ当たり前のことになる様な社会を作るためには、いま私たちはどうしたらよいかを常に問いかけていくことが求められると思います。そのまたとない材料を、人形は与えてくれていると考えます。

3つ目、これは私の専門である地理学の観点からの発言になりますが、現在においても日本全国で人形をきっかけにした草の根的な交流の運動が同時多発的におこり互いに刺激あっていることが、地理学からみても面白い事象だと思います。愛知県の運動自身も私が関わったのは最近でして、もともとは尾張地区、西三河地区、東三河地区など、各地に残された青い目の人形や、答礼人形に関する興味や志を持った方々が立ちあがって活動していくなかで、それらが「ミス愛知」という共通の旗印にひかれて一つに集まっていったものです。隣の県でも、同じように「ミス静岡」が、自発的な運動の盛り上がりの末、先日（2016年2月）里帰りをしましたし、本日登壇者としてお越しいただいている「ミス岐阜」、「ミス三重」の関係者もそうです。「ミス愛知」を含め、全国各地にその地域の代表となる人形が存在することは、澁澤榮一たちの残したよい仕掛けであったと私は思っています。全国どこでも里帰り運動を起こすことができる素地が、答礼人形が送られたその時からできていたわけですから。そして、これらの各地の運動が同時多発的に盛り上がっていくなかで、横の繋がりが出来ていくということ——もちろん、その横の繋がりの構築には、本日ご登壇いただく青木さんのようなキーパーソンが必要なわけですが、これが今日日本のNPO、NGOの活動全体で言われている、横の繋がりをどう構築していくかという問題の一つの答えを提供することになるかと思えます。当然、各地の活動は自発性があるもので強引な統合は難しい面もあるかもしれませんが、各地の人形交流運動の盛り上がりとその横の連携については、他のNPOやNGOの連携活動に関しても参考にすべき事例だと思います。

### 「ミス愛知」の思いを背負って

最後に、蛇足ながら明日（2016年7月10日）は参議院選挙の投票日です。今回の選挙から18歳選挙権が導入されましたが、「ミス愛知」さんは、1927年生まれですので、彼女にとり18歳の年は1945年になります。当然、1945年の7月9日現在には18歳選挙権どころか婦人参政権もありませんでした。もしも彼女が普通の人間として愛知に生を受けていたら、18歳の7月には豊川の海軍工廠あたりに勤労働員されているか、銃後の若妻として戦地の夫の無事を祈っていたでしょう。彼女の生まれた時代はこんな時代でした。それを乗り越えて、今の我々には国民主権の日本があります。余談ではありますが、本日お越しいただいた皆さまには、そのことの有難味も今一度思い返されて、答礼人形と青い目の人形の受難を受け止めつつ、主権を行使して社会を未来に受け継いでいっていただければと思います。